

# 来館者のニーズに寄り添うことで歴史館利用者数を増やすとともに 歴史に学ぼうとする人材を育てる体験学習指導の在り方について

宮崎市生目の杜遊古館  
学習指導員 新町 芳伸

## 【要 約】

本研究では、これまでに体験学習として実施されている体験内容及び団体申し込みの内容について、体験内容の指導側から要点の洗い出しと体験者が求めているものを見定めを行った結果、体験希望者が望む興味・関心やデザイン・色彩などの美的観点、希少性、意外性、知的な満足度を満たすことが効果的だという方向性を見いだすことができ、予算や材料の入手等の課題もあるが今後の改善点を洗い出せた。

## はじめに

歴史に興味を持つ人が今どれほどいるだろうか。生目の杜遊古館（以下、本館とする）では、旧石器時代から近現代までの資料が展示してあるが、展示物の量と展示に占める割合は旧石器時代や縄文・弥生時代の遺跡や古墳からの出土品が多い。その分、天ヶ城歴史民俗資料館や佐土原歴史資料館などに現代の人々に理解を得やすい江戸時代から昭和の時代に関する資料が展示されており、宮崎の歴史に関する事例が幅広く用意されてはいる。しかし、来館者数を見るとそれほどまでに歴史に興味や関心をもっている人は多いとは言えない状況である。

しかし、宮崎市民のふるさとの歩みについての興味・関心を高め、郷土愛をはぐくむためには、宮崎の考古、歴史、民俗に関する調査及び研究、展示講座などを通して今あるものをもっとアピールしたり歴史に触れたりすることで、体験した人々が「得られるもの」を理解してもらうことが大事ではないか考えた。また、地域の関係機関・団体と連携し、歴史文化の拠点として、地域資源の調査・研究並びに活用・発信を通じた地域づくりについて今後さらに尽力していくことが、本館の所期の目的達成に貢献すると考える。

そこで、今年度は、昨年度実践も踏まえながら、現在の体験活動のポイントを明らかにすること、体験時の指導方法に改善を加えること、体験だけでなく歴史的事実や身近な関連事項を加え、親しみのある体験にできないか考察を加えること、そしてそれらに対して体験者に感想を聞いて、今後の体験活動に活かすことを目標として取り組んだ。

なお、今後、出前授業等を通して歴史に触れることが可能であると考え分野にも考察を加えることとし、竹灯籠の制作、小学校における外国語学習、中学校における英語科での日本文化の発信（宮崎の文化の発信）を意識した教材への取入れなども提案したい。

歴史・伝統・文化をただ受け継ぐだけでなく、今の時代に応じた伝承として考えていきたい。

## 第1章 受け継いだものを詳しく知る

### 第1節 体験活動の概要と指導のポイント

#### (1) 体験活動の概要

##### ① 草木染め

草木染めは玉ねぎの黄色い皮を煮出してとった色水で布を染める体験活動である。染色の手順を理解しながら、指導のポイントを明らかにしてきた。また、新型コロナウイルス感染症のために休館を余儀なくされた時間で、前任指導員の方々が残してくださった染色液を使ってみることで、様々な色に染めることができることと、媒染液によって発色が変わり、染色活動に驚きと学びがあることが分かった。

##### ② 勾玉作り

勾玉作りは、本館でも一推しの制作活動で、小学校の修学旅行や遠足などで希望される活動では一番多いと言える。

発泡スチロール製の制作過程の見本や文字カード等を参加者に示し、適宜詳しく説明しながら制作してきた。より高い完成度を求める場合は、一人ひとりに「間近でして見せる」ことが一番理解を得やすいようである。

##### ③ 埴輪・土笛制作

埴輪は、円筒埴輪の形を基本として制作している。シンプルな円筒埴輪ができたなら、それに装飾を加えて、体験者が思い出に残るようなものにして持ち帰るようにしている。前任指導員が工夫して作った道具類を使うことで、誰でも簡単に作れるようにしてきた。

##### ④ 竹とんぼ制作

これまで出前授業として行ってきた内容で、身近な植物を使って昔ながらの遊び道具を作ることができる点で歴史的にも技術的にも有意義な制作活動であるといえる。

材料は竹という自然素材であり手に入りやすいこと、加工しやすいこと、遊具として完成した後は、飛ばして遊べるという面白みも持っている。安全への配慮を最大限におこなうこと及び遊ぶ時にも周囲の安全と周囲への安全に注意するよう説明して実施してきた。

#### (2) 指導のポイント

##### ① 草木染め

染色に使うエコバッグは木綿製で、そのままでは染料がしみこみにくい。そこで製品出荷時に付けられた糊を予め洗剤で落とし、着色しやすいようにタンパク質を付着させる作業を行うか、それに代わる薬品処理をしておくことが大事である。

染料に使う玉ねぎの皮を乾燥させた状態で、エコバッグ1枚あたりに必要な量を計量してストックしておいたり、染料の濃さによっても染め上がりが濃かったり薄かったりする。その加減を予め見定めて指導員自身の体験知を高めながら日々の指導に生かしている。

##### ② 勾玉作り

勾玉作りは、一つ一つの工程が10分程度と時間を要する中で制作手順をホワイトボードで示したり作業の進捗状況を見ながら適宜指示したりしている。小学生は制作可能では

あるが、指先の力、握力など個人差によっては難しい作業でもあるので随時、模範の作業として示すことを通して、作業を手伝いながら体験者の補助をすることが効果的である。

### ③ 埴輪・土笛制作

埴輪の制作では、前任指導員が使っていた道具を効果的に使用することができた。必要な道具がセットしてあり、その道具を手順に沿って使うことで、埴輪の各部分を効率的に制作することができた。土笛についても、道具を適切に使うことで効率的につくることができた。

### ④ 竹とんぼ制作

竹とんぼの制作では、完成品は軽くてバランスよく組み立てる必要がある。竹とんぼ制作は1時間で完成するように組んでいる。したがって、短時間に制作作業が行われることが必要である反面、竹という固い繊維質のものを加工する大変さもあり、効率よく作業が進められるように部品を作っておくことで、作業の手間を省きながら行い、完成品の飛び具合でこの体験が評価されるようである。部品の準備が竹とんぼ制作指導の肝になっている。

## 第2節 受け継いだものをさらに改良・工夫することで体験者の満足度を上げる

### (1) 工夫改善の在り方

#### ① 草木染め

草木染めの指導の効率化を図るために、また、指導中に指導員自身が手順を間違わない方法として掛図を活用した。これは前任指導員が制作したもので、掲示資料としてあるものを体験時に活用することである。また、出来上がり見本を制作し、ゴールを示すことにより、体験者が体験の見通しを持てるようにしている。興味・関心をさらに高めるために、他の自然素材で草木染めができないか模索し、赤シソの葉がピンクや緑色に発色することから、体験に来ていた参加者にどの色が好きかを尋ね、染め色によっても体験者は次の体験に期待を寄せることが分かった。素材による染色の多様性が来客者数を増やす一因になることが予測できた。さらに、本館での体験は「ことはじめ」であり、いろいろなもののでできる可能性があることを体験者に気付かせ、その後は体験者が時間と素材を見つけ出して独自に取り組むようになることがゴールだと考えている。

図1 【草木染の手順・掲示資料】 【媒染液による発色提示資料】 【赤紫蘇抽出液状況】



#### ② 勾玉作り

勾玉作りは、ブロックとサンドペーパー2種類を使って削る作業と一番目の細かいサンドペーパーで磨き上げる作業で構成している。来館者は、勾玉を手にすることを楽しみに

している方が多い。その思いが成就するように、石の種類（色）による作りやすさのアドバンスをしたり、削りや磨きのポイントを子どもには日常生活や学校での学習活動中の動作などをとらえた表現で説明したりしている。

### ③ 埴輪・土笛制作

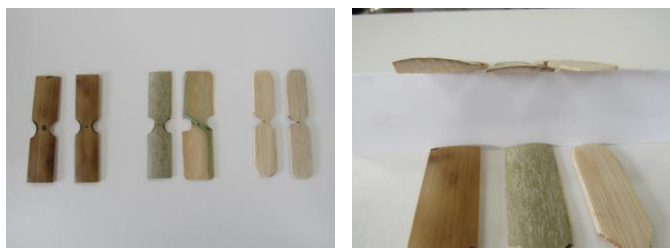
本館で制作してもらっているのは円筒埴輪である。掲示資料で制作手順を示し使用する道具を説明しながら、円筒形に形作ることを基本とし、体験者の満足度を上げるために、埴輪に装飾を付けることを第2の作業として、完成後は室内等に飾ってもらえるようにしている。ここでの課題として、制作するものの価値や歴史的な位置づけと体験者の満足度の一致があげられる。「つまらない」と思われずに、制作に参加してもらえる視点を探したい。

### ④ 竹とんぼ制作

竹とんぼ制作は、「はね」部分を削って軽くし、左右のバランスをとる作業と軸を付ける作業で構成されているので作業としては単純である。しかし重さと左右のバランスをとることは3次元での調整となる点で、子どもには時間のかかる作業である。

そこで、予め、部品である「はね」を左右の長さを同じにし、薄く削って軽くする作業に時間をとらなくてよいように、完成時の重さが2～3グラムになるよう、調整して準備をした。

図2【はね、左：調整前、中央：調整後、右：最終調整後】



## 第2章 受け継いだものに新たな意味を付加する

### 第1節 体験活動の意味を示す・・・歴史的意義や生活に根付く今の状況などから

#### (1) 実施している内容について

##### ① これまでの体験活動内容について付加してきたこと

草木染めについては、いろいろな植物の色素と媒染液の組み合わせでいろいろな発色を楽しむことができる。また、自然素材は身近なもので手軽に楽しめることを示しながら、本館での体験を入り口とし、こののちは体験者本人が試してみたいと思うようにあってほしいと思っている。そのためにも、いくつかの染色素材については示せるようになっておきたい。勾玉についても、勾玉自体のいわれはもとより、本館が選択している形の由来や当時の素材の多様性などを知識としてある程度知ってもらえる準備がしたいと考えて、本館展示物を例にしたり、各種書物から引用したりして話題を提供している。

また、講座等においても、講座内容に関する歴史的・民俗学的な中でのこれまでの変遷等を取り上げ、今の生活と関連付けて、体験がただの「してみた」「やってみた」に終わることなく、「昔の人は・・・」とか、「昔はこんなに手間がかかっていたのに、今は・

・ですね。」等の感想が聞けるような内容にしたいと鋭意努力している。

## ② 体験者にとってどういう意味合いかを意義づけること

体験者とは会話を通して、本館に来ていただいた理由や体験内容についての感想などを意見交換しながら進めている。指導員としては、これまでの経験を生かして、年齢に応じて、作業の具合をみながら良いところを褒めたり児童一般の技能についてはどの程度かを話したりしている。個人には、作業の邪魔にならない程度に、体験内容や本館に対する感想を求めながら歴史に触れることの良さを話すようにしている。保護者には、子どもの成長について体験が役に立つことや、様々な体験に子どもに触れさせることの大事さなども話している。

来館者と、こういう交流を通して体験の大事さや歴史に学ぶ機会の利点や大切さを説くようにしてきた。これまでもされてきたことかもしれないが、新たな視点で歴史館に足を運ぶ人々の開拓をしなければならないと考えている。

## ③ 待ちの姿勢から攻めの姿勢へ

通常は、本館の体験活動メニューを見て、体験したいという人がやってくるのを待っている毎日である。が、それでは来館者の増は期待できない。それどころか、これまでに述べてきた歴史に関する内容や、それらが詰まった意義深い体験学習は市民全体にはなかなか広がっていかない。そこで、出前授業をはじめとして地域や学校などに呼び掛けて、体験学習の機会を積極的に取り入れてもらえるよう働きかけることが必要である。

本年度は、「子どもたちを集めた歴史学習クラブ」を発足させることにし、宮崎市及び東諸県郡の2町に募集をかけ「レッツ！タイムワープ in 遊古館」と題して、歴史学習や体験学習、そして今、社会で言われているSDGsの観点からの学習に取り組んできた。2月に最終回である閉講式を控え、これまでの4回は順調に進んできた。

## 第2節 国際化社会を見据えて・・・日本遺産に認定、次は世界遺産登録も視野に入れて

### (1) 外国語学習に歴史を取り入れ、歴史認識向上・語学力向上と情報発信をめざす

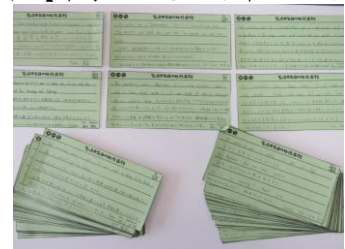
宮崎西高等学校附属中学校、宮崎北高等学校国際交流部、宮崎大宮高等学校の利用があった。中学生には体験活動と展示物を英語で説明する体験をしてもらった。また高校生にも、体験活動を通して外国の方と英語で会話をするという目標のもと、英語での展示物紹介まで取り組んでいただいた。

その結果、中学生の感想には、小学校の時に来館したことがあり懐かしかった等の感想と英語で展示物を説明する時には、「The artifact was・・・」という風に説明したという文章も書きこんだ感想文をいただくことができた。

今年、宮崎市でG7農業大臣会合が開かれる。それ以外でも、旧来イベント開催時には外国の方々も多く来県される機会も多い宮崎市である。そういう機会を活用して、児童生徒の皆さんに、外国の方々に宮崎の歴史を紹介してもらえれば情報発信としても有益である。

小学校6年生社会科の中でも「つながりの深い国々の暮らし」という単元で外国のことを

図3 【中学生からのお礼カード】



学ぶ。外国語活動や外国語科に力を入れている昨今、身近な素材として宮崎の歴史を取り入れてもらえるよう今後も提案していきたい。

(2) 社会的に言われている SDGs の流れに乗って

歴史とは人々が生きてきた証であると考えます。その時代、その時に応じた人々の判断や生活の営みが積み重なって歴史を形作ってきた。先述したように、学校教育では、発達段階に応じて、日本の国内事情や世界の情勢を学ぶ機会がある。

昨今の世界状況においては、大人や子どもを問わず、現実問題として様々な課題が、多くの人々に降りかかっていることもある。

そこで、難しくない形で、人々が興味を持つ内容であり、且つ歴史的な体験学習ができるものを今後考えていきたい。

まずは、次年度事業として、飯盒炊飯と災害時の対処法を組み合わせた内容という実用的なものを、また、竹を使った灯籠づくりで、光と形をめ度ながらデザインや豊かに過ごすアイデアづくりなどを取り上げていきたい。

図4【竹灯籠：長さや太さを考えながら、そのサイズに適したデザインを試作】



## おわりに

歴史は「過去のもの」ではなく「人々が生きてきた証」であり、既に終わったことではなく、それらの事実から発展・変容して今の社会や私たちの生活があると捉えたい。また、人々にもそう捉えてほしい。そう考えていくと、今を理解したり、この先どうすればいいのかを考え判断したりするときには参考になることは間違いない。

最後に竹を取り上げたのは、電灯が発明された経緯の中に、日本の京都の竹が使われていたこともあり、身近なもので楽しく、達成感のある活動ができれば、体験希望者のニーズにも合致し、体験学習の意義も満たしながら、そして最終的には、宮崎文化振興協会並びに本館が持つ使命を全うできるのではないかと考える。今後もさらに努力していきたい。

## 参考文献・参考資料リスト

- 1) 畑野栄三 文 全国郷土玩具館 監修 「竹細工」 文溪堂 2018
- 2) 田中瑞波 監修 「かごと器の技法がわかる竹細工」 メイツ出版 2020
- 3) 箕輪直子 著 「草木染め大全」 誠文堂新光社 2022